

いま、「平和」について考える 歴史学・文学からの視座

現代社会は、人・モノ・情報が交錯し、今や瞬時に世界中と繋がる時代となった。

一方で、世界はいまだ混沌とした状況にあり、「平和」への道を模索している。

このような世界情勢を踏まえ、令和6年度名桜やんばるアカデミーでは、

名桜大学の建学の精神である「平和・自由・進歩」に基づき、

歴史学と文学からの横断的なアプローチによって、新たな「平和」を考える。

これからの社会において「平和」をどのように構築すべきか。「平和」の意義をやんばるで考える。

Vol.1

2025.2/5水 18:15～19:45

「戦争と文学—古山高麗雄の従軍体験」

講師：小嶋 洋輔 教授（日本近現代文学研究）

古山高麗雄は1970年に「プレオー8の夜明け」で芥川賞を受賞した。古山が50歳のことである。古山の前半生は、当時の「スタンダード」「常識」としてあった「軍国」的な考えとそれに反発しつつ付き合うものと要約できる。それらの体験を古山は戦後四半世紀経過した後に小説化しようになった。古山のこうした戦後の眼差しは、若かりし自分と「軍国」をどのように描いたのだろうか。それを探ることは、「日本」が「戦争」をどのように相対化し得たか／し得なかったかを見出すものとなる。戦争体験を書いたほかの小説家を紹介、比較しつつ、古山の描いた「平和」に迫ってゆきたい。

<https://zoom.us/j/99487158466?pwd=jqxD4dOdLGzkkT5SuXjSUfBFLFmSMo.1>



Vol.2

2025.2/12水 18:15～19:45

「東南アジアの植民地から見た帝国日本」

講師：坪井 祐司 教授（東南アジア史）

20世紀初頭、東南アジアの大半の地域は欧米の植民地であり、各地でそれに対抗するナショナリズムが高揚した。イギリス統治下のマラヤ（現マレーシア）におけるマレー人による出版活動もその一部であった。その植民地秩序を破壊しようとしたのが遅れてきた帝国日本であった。戦争の危機が迫るなか、マレー人のナショナリストたちはどのようにアジアの現状を見ていたのか。そのなかで日本に向けられた眼差しはどのようなものだったのか。そして、帝国主義、植民地主義に覆われた時代における平和とは何だったのか。マレー語による言論活動の紹介を通じて、彼らが目指したものについて考えてみたい。

<https://zoom.us/j/99680393786?pwd=aCG0pa20WQ0WkDE5K8kuHWWHBuvV6o.1>



Vol.3

2025.2/19水 18:15～19:45

「琉球処分をめぐる日・米・清の動き」

講師：山城 智史 上級准教授（国際関係史）

琉球処分によって、琉球は琉球藩、沖縄県と段階を踏みながら、日本に組み込まれることになった。清朝は琉球処分に対して抗議をするが、明治政府は琉球処分をあくまでも「内政」と主張することで取り合わなかった。しかし、1879年に米国の介入によって、琉球処分は徐々に日清間の外交問題として発展していくことになる。明治政府はこれを機に、懸念事項であった日清修好条規の改正を琉球問題と絡めてくる。日本・米国・清朝の一次史料を紹介しながら、約150年前の琉球をめぐる国際関係史から「平和」への道を模索する。

<https://zoom.us/j/93448815983?pwd=D9aewxeLTjccM7omoZEh8MK7LXCsfk.1>



■参加対象者／一般市民・学生

■先着100名／参加費無料

■開催場所／名桜大学北部生涯学習推進センター1F研修室 及び オンライン(ZOOM)

●お問合せ先：環太平洋地域文化研究所（0980-51-1107）



公立大学法人

名桜大学
MEIO UNIVERSITY